

# Women's sports

## 女性のスポーツ大会の 実態と問題点（上） 高橋義雄

このページでは今回から2回にわたって「実践スポーツクリニック——スポーツから見た年代別・性別スポーツ指導」（文光堂発行）より“女性のスポーツ大会の実態と問題点”の項をご紹介します。

これは、WSFジャパン会員でもある東京大学大学院の高橋義雄さんが執筆されたものです。なお、文中の新聞資料はWSFジャパン事務局が提供しました。



はじめに

日本の夏の風物詩のひとつに、甲子園の高校野球があげられる。しかし1994年はいつもと少し趣向の異なる記事が世間を騒がせた。全国に6人いる「女子」選手の話である。少年野球には以前から女子のチームがあるが、高校生の女性プレーヤーが現われた。今春、東京六大学野球連盟が女性に門戸を開き、明治大学にアメリカ人女性が入部した。また京滋六大学準硬式野球新人戦では本庄裕美さんがヒットを記録した。これらの歴史的事件がマスコミ各社の関心を女性の野球に向けさせた。

ここでは女性のスポーツ大会について、その歴史的背景と最近の動向、そして将来に向けた課題をスポーツ医学的な視点を取り入れながら、新聞記事などを参考に述べることにする。

### 1. 女性スポーツ大会の歴史

近代オリンピックに、はじめて女性が登場するのは、1900年の第2回パリ大会からである。それまでは女性の参加は、認められていなかった。競技種目はテニスとゴルフだけであった。

しかし、大会ごとに女性の参加種目は追加された。1992年のバルセロナオリンピックでは、新たに女子柔道やバドミントンが追加され、同年のアルペールビル冬季オリンピックと合わせて25競技が実施されるようになった。

日本の女性は、1928年の第9回アムステルダム大会

に、人見絹枝さんが初めてオリンピックに参加した。そして1992年には、夏冬合わせて21競技に103人が参加するようになっている。

### 2. 女性のスポーツの拡大

女性のスポーツ種目は年々拡大されてきている。日本の女性の選手の参加種目も、東京オリンピックを機に増えはじめ、1992年のオリンピック夏季大会では15種目、82人にのぼっている。

しかし、性別によって競技種目の内容が異なっている場合がある。（表1）は、1992年のバルセロナ大会における男女の競技種目の相違をあげたものである。

性別によって異なる種目を行う理由は、まず「女性にとってハードなスポーツ種目は身体によくない」という考えからである。そのために、たとえば陸上競技では、男性が5,000mなのに女性は3,000mに、また水泳の1,500mが800mに置き換えられている。さらに自転車競技にも男性に比べ距離が短い種目が採用されている。

また、「女性らしさを損なうスポーツには女性を参加させない」という理由から、ウエイトリフティング、レスリング、ボクシングなどの種目が除外されている。

反対に女性の美しさを強調する競技として、シンクロナイズドスイミングや新体操が、女性だけで実施されており、男性の参加は許されていない。国内では、どちらの競技も男性が参加している。

では、性差と競技成績について、マラソンと水泳100m自由形を例にして、世界最高記録の推移をみていくと近年の女性の著しい記録の向上があることがわかる。

男性の競技が果たしていないワールドカップに出場しているのが女性のサッカーである。女性のサッカーは、昭和30年代半ばからチームができ、昭和54年に日本女子サッカー連盟が発足した。翌年には、全日本女子サッカー選手権大会が開催されている。現在、日本サッカー協会の登録選手数は、19,498人にのぼっている。

女性の競技人口の増加とともに、スポーツ競技団体に女性の意見が反映される必要が生まれてきた。しかし女性のコーチや競技団体の役員、たとえば理事や評議員などの役職につく女性は少ない。

日本では、女性初のJOC理事に全日本なぎなた連盟理事長の河盛敬子氏が1991年に就任し、1993年には日本体

育協会会長に高原須美子氏が就任している。しかし「日本の女子選手は概して社会的関心が薄すぎる」(WSF JAPAN 代表三ヶ谷洋子氏の発言:1988/6/28 日経)という指摘もあり、スポーツ界における女性の人材の育成が望まれている。

このことは、アメリカでも同様で、1987年3月19日の『USA TODAY』には、大学の女性スポーツチームに女性のコーチが少ないことを指摘した記事が掲載されている。

### 3. 女性とスポーツのルール

女性は、体型の違いや体脂肪量の違いなどから、競技に女性専用のルールをもうけている競技がある。たとえばバレーボールなどは、国際ルールでネットの高さは男性2m43cm、女性2m24cmと決められている。さらに日本では年代によっても、ネットの高さに違いを設けている。

反対に女性と男性の競技のルールに違いのないスポーツにサッカーがある。サッカーは、当初「胸に来たボールは手で受けとめていい」という特別ルールがあったが、現在はフィールドの大きさや時間、ルールがすべて男性と同じで行われている。

### 4. 女性のスポーツ用品の課題

1993年「女性には女性用のスポーツ用品が必要なことにやっと気づき始めた」の書き出しで、アメリカと日本の女性スポーツ用品事情を比較した記事(1993年/2/25 朝日)が掲載された。また、「陸上日本代表女子のパンツ 白から赤へ 下着気にせず好成绩」(1993/7/21 報知)という見出しで、日本代表選手のユニホームが従来の上下白から、赤いパンツに白いラインのユニホームに変更することを伝えている。これは、「以前から女子については、白では下着が透けることを気にしたり、また生理の問題もあって白いパンツは変えてほしいという声」が相ついだためである。また、ゴルフ用品、テニス用品、自転車のサドルにも女性の身体に合う女性用の製品が開発され、少しずつではあるが女性の声がスポーツ用品にも反映されるようになってきている。

このようなことは、学校体育の現場でもスポーツウェアの変化に表れている。「ブルマーはいや！」(1994/7

/5読売)にはブルマーにかわり、学校体育着ですその短いジャージが普及していることが報告されている。理由は「太もものつけ根まで見える」「ちょっと屈伸しただけで下着が見えてしまう」「生理中だとわかってしまう」「体の線がくっきり出る」などさまざまである(1994/7/5読売)。(つづく)

※文中、編集部が加筆しています。

表1 オリンピック大会における男女の競技種目の相違(1992大会より)

	男子のみ実施	女子のみ実施
陸上競技	5,000m 3,000m 50km競歩 三段跳び 棒高跳び ハンマー投げ 十種競技	3,000m      七種競技
水泳	1,500m自由型 4×200mリレー 水球	800m自由型 シンクロ(ソロ) シンクロ(デュエット)
ボクシング	12階級	
自転車	1,000mタイムトライアル 4,000m追い抜き団体 100m団体タイムトライアル 50km個人ポイントレース	
フェンシング	エペ個人 エペ団体 サーブル個人 サーブル団体	
サッカー	実施	なし
体操	つり輪 あん馬 平行棒 鉄棒	段違い平行棒 平均台 新体操
漕艇	舵つきペア 舵つきフォア	
射撃	リッドファイアピストル個人25m フリーピストル個人50m スモールボアライフル伏射個人50m ランニング・ターゲット10m	スポーツピストル個人25m
ウエトリフティング	10階級	なし
レスリング	フリースタイル10階級 グレコ-マンスタイル10階級	なし
ヨット	フィン級	ディンギー(ヨーロッパクラス)
カヌー	カナディアンシングル500m カナディアンシングル1,000m カナディアンペア500m カナディアンペア1,000m カヤックシングル1,000m カヤックペア1,000m カヤックフォア1,000m スラロームカナディアンシングル スラロームカナディアンペア	カヤックフォア500m
近代五種	団体 個人	なし
野球	実施	なし